

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40 ~ 11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 材料・整理・染色

[P-053]

家庭用電子レンジを用いた天然染料の染色方法の検討

紅茶による綿布の染色

*佐々木 麻紀子¹ (1. 東京家政学院大学)

◆ 被服 - 材料・整理・染色

[p-055]

家庭用電子レンジを用いたサクラスモークチップからの色素抽出と絹布の染色性

*藤本 明弘¹、山名 凱¹、塚崎 舞²、森田 みゆき² (1. 宮崎大、2. 東京学芸大)

◆ 被服 - 材料・整理・染色

[P-057]

保管室を考慮した圧縮服の防しわ性に関する研究

*加藤木 秀章¹、傳法谷 郁乃¹ (1. 実践女大)

◆ 被服 - 材料・整理・染色

[P-059]

仙台地方の染型紙の保存とデジタルアーカイブス

印絆纏用染型紙のデジタル化について その1

*川又 勝子¹、佐々木 栄一² (1. 東北生活文化大学、2. EHS高材研)

◆ 被服 - 材料・整理・染色

[P-061]

ムラサキの根を使用した紫根染の染色温度と染色結果について

*青木 正明¹ (1. 京都光華女子大学短期大学部)

◆ 被服 - 材料・整理・染色

[P-063]

学校現場における染色教材の開発と実践

—合成繊維の染色実験とパッチワーク制作—

*齋藤 愛¹、天木 桂子² (1. 岩手県立大短、2. 岩手大学)

◆ 被服 - 構成・衛生

[P-065]

炊き出し活動や野外活動時に用いるアームカバーの開発

*菊地 紗代¹ (1. 東北生活文化大学)

◆ 被服 - 構成・衛生

[P-067]

中高年における凍結肩と衣服の着脱動作に関する実態調査

*高橋 佐智子¹、丸田 直美¹、前田 亜紀子¹ (1. 共立女子大)

◆ 被服 - 構成・衛生

[P-069]

若年女性におけるアクセサリ着用の実態と重心動揺への影響

*伊豆 南緒美¹、佐藤 真理子¹ (1. 文化学園大学)

◆ 被服 - 構成・衛生

[P-071]

寒さを忘れるホカホカ手袋をさがそう

*野中 健志¹、鈴木 優友姫¹、鈴木 玲花¹、小泉 津奈¹、黒崎 はな¹、西山 京花¹、丸山 剛輝¹、本村 陽葵¹、高城 麻悠子¹、篠崎 俊哉¹ (1. 神奈川県立横須賀高等学校)

◆ 被服 - 心理・意匠・服飾

[P-073]

口コミ分析からみた靴下の購入・着用の実態

*高橋 美登梨¹、金井 光代²、内藤 章江³、藤田 雅夫⁴ (1. 埼玉大、2. 文化学園服飾博物館、3. お茶の水女大、4. 共立女大)

◆ 被服 - 心理・意匠・服飾

[P-075]

ミシン刺しゅうにおける新たなデザイン手法の検討

プログラミング刺しゅうツールの活用

*本多 素子¹ (1. 昭和女大)

◆ 被服 - 心理・意匠・服飾

[P-077]

若年女性のジェンダーレスに対する姿勢がアパレル購買行動に及ぼす影響

*加藤 千穂¹ (1. 椙山女学園大)

◆ 被服 - 心理・意匠・服飾

[P-079]

着物文化のファッション化

毛皮の使用を事例として

*山村 明子¹ (1. 東京家政学院大)

◆ 被服 - 心理・意匠・服飾

[P-081]

古代中国の服飾における菱形デザインの展開

*水野 夏子¹ (1. 大阪樟蔭女子大)

◆ 住居

[P-083]

日本人の共生意識に対応した子育て・子育てのための共生型集住に関する研究

子育て状況と共生型住宅への居住意向

*大橋 寿美子¹ (1. 大妻女子大学)

◆ 住居

[P-085]

住生活文化を学ぶカードゲーム教材の開発と教員養成大学学生への実践

*江口 千夏¹、鈴木 佐代¹、豊増 美喜² (1. 福岡教育大、2. 大分大)

◆ 住居

[P-087]

高齢者が居住するコレクティブハウスの実態調査

*西田 思佳¹、藤居 由香¹ (1. 岩手県立大)

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40～11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 材料・整理・染色

[P-053] 家庭用電子レンジを用いた天然染料の染色方法の検討

紅茶による綿布の染色

*佐々木 麻紀子¹ (1. 東京家政学院大学)

キーワード：天然染料、紅茶、電子レンジ、手工芸染色、染色ムラ、染色堅ろう度試験

目的 本研究では、季節や地域などに左右されずに比較的安価に入手しやすい素材として紅茶を取り上げ、従来の加熱浸染と電子レンジによる染色とを比較し、基本的な染色条件および染色方法の検討と各種堅ろう度試験を行い、その実用性を明らかにすることを目的とした。**方法** 紅茶抽出液は市販紅茶を煮沸抽出し濾過して作成した。試布はJIS染色堅ろう度試験綿カナキンを使用し50℃のイオン交換水で洗浄して染色に供した。浸染染色は80℃、染色時間10分～60分とし、電子レンジ染色は500Wで1分～10分、浴比を変化させて加熱を行いその影響を比較した。得られた染色布のL*値、a*値、b*値を色差計NR12A（日本電色株式会社製）により測定し染色布の明度及び色相を評価した。各堅ろう度試験は、JIS染色堅ろう度試験法に準じて行った。**結果** これまで電子レンジ染色では、浴比が小さくても染色が行えるが染色ムラが生じやすいという問題があったが、加熱途中で布を動かすなどの操作を追加することでムラ染を防ぐ効果があった。高温になるほど染色布のL*値は小となる傾向が認められ、染色温度の効果は比較的大きいため短時間染色の場合あらかじめ染色液を一定温度にしておく必要があった。摩擦及びホットプレッシング堅ろう度試験ではいずれも4級以上であり、電子レンジによる紅茶染色は実用上問題ないことが確認できた。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40 ~ 11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 材料・整理・染色

[p-055] 家庭用電子レンジを用いたサクラスモークチップからの色素抽出と絹布の染色性

*藤本 明弘¹、山名 凱¹、塚崎 舞²、森田 みゆき² (1. 宮崎大、2. 東京学芸大)

キーワード：電子レンジ、染色、サクラ、スモークチップ、色素、抽出

目的：我々は、天然染料を用いた電子レンジ染色において、茜や紫根などの染材から効率的な色素抽出が可能であることを明らかにしてきた。一方、日本の伝統的な染材であるサクラは、その美しい色彩と文化的価値から注目されているが、従来は主に生の枝や花を使用するため、染色可能な時期が限定され、染材の長期保存が困難であるという課題があった。そこで本研究では、通年入手可能で保存性の高いサクラスモークチップに着目し、電子レンジを用いた色素抽出条件の最適化を行い、得られた抽出液での絹布の染色性について検討した。

方法：色素の抽出は、ジップロックコンテナにサクラスモークチップ10g、溶媒500mlを加え、500Wで所定時間加熱することで色素を抽出した。絹布の染色は、ジップロックコンテナに絹白布0.5g、染色液25mlを加え、500Wで所定時間加熱した。絹布の染色性は、色差計を用いて $L^*a^*b^*$ 値、色差 (ΔE^*ab) を測定することで評価した。

結果：抽出条件を液性、加熱時間で検討した結果、液性がアルカリ性で、加熱時間10分で最も色素を効率的に抽出できた。また、常圧煮沸と電子レンジ法での色素の抽出効率を比較したところ、電子レンジ法の方が短時間の加熱でより多くの色素を抽出可能であることが明らかとなった。絹布の染色性に及ぼすpH、加熱時間の影響を検討した結果、最適条件は液性が酸性で、加熱時間6分であった。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

2025年6月1日(日) 10:40 ~ 11:20 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 材料・整理・染色

[P-057] 保管室を考慮した圧縮服の防しわ性に関する研究

*加藤木 秀章¹、傳法谷 郁乃¹ (1. 実践女大)

キーワード：圧縮、衣服、防しわ性、保管室

緒言 被災後の復興物資が届くまでの生活では、日用品不足が予想され、保管に優れた衣服も必要となるが、保管場所を考慮した衣服の機械的特性に関する研究報告例が少ない。

そこで本研究では、保管環境の調査し、その環境を模擬した衣服の防しわ性について調べた。

調査および試験方法 本研究では、日本の関東圏の保管場所の室内温度を測定(2024年7月)した。その調査結果より、最高温度は40℃程度であった。

圧縮された衣服(素材：綿)から試験布を切り出した。自作した試験装置を用いて環境温度約41℃に設定し、試験布のしわ回復角について測定した。

試験結果 試験前の試験布の表面観察より、組織表面には目開きがみられた。たて方向の試験布のしわ回復角は、よこ方向の場合と比べ若干大きかった。綿繊維は主にセルロースで構成されており、245度から綿繊維の熱劣化¹⁾が生じる。そのため、主に組織の構造が布地の防しわ性に影響を及ぼしたと考えられるが、より詳細な検討が必要である。

結言 本研究では、保管環境を考慮した圧縮服の防しわ性について調べた結果、組織の構造が布地の防しわ性に影響を及ぼすことを示唆した。

[文献] 1) M. Isola et al., Polymer Degradation and Stability, 228, 110937 (2024).

謝辞 本研究においては、調査させていただきました施設のみなさまに御礼申し上げます。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40～11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 材料・整理・染色

[P-059] 仙台地方の染型紙の保存とデジタルアーカイブス 印袷纏用染型紙のデジタル化について その1

*川又 勝子¹、佐々木 栄一² (1. 東北生活文化大学、2. EHS高材研)

キーワード：型染め、染型紙、印袷纏

目的 明治期から昭和期にかけて、仙台地方では印染が多数染められていた。その染物は殆ど残されていないが、染色に用いられた染型紙が多数残されている。これらは長期間染工場内に保管されてきたものであるが、劣化が進み破損箇所も多い。今後も劣化が進むことは確実であり、できるだけ早く調査・分類とデジタル画像保存を行うことが必要である。本研究では、仙台市内の染色工場から寄託された印袷纏染色に用いられた染型紙（以下袷纏型紙）の調査とデジタルアーカイブ構築に取り組んだ結果を報告する。

方法 調査対象は武田染工場（仙台市若林区）から寄託された袷纏型紙361枚とした。これらの資料について、①ドライクリーニングとフラットニング、②写真記録、③資料計測、④大判スキャナを用いたデジタル画像収録を行い、収録したデジタル画像を用いて文様調査を行った。

結果 計測の結果、ヨコ幅の寸法で型紙は大きく2つに分類することができ、62cm以上の型紙は腰柄に用いられた型紙、56cm以下の型紙は背紋に用いられた型紙であることが示唆された。彫られた模様をみても、背紋はいずれも背縫い代分が勘案されて1枚または2枚で一つの文様を表現するようになっていた。背紋227枚（62.9%）、腰柄129枚（35.7%）であり、今回対象とした型紙には、衿文字や袖柄、総柄の型紙は殆ど見られなかった。

本研究は、JSPS科研費22K02101の助成を受けて行った。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40～11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 材料・整理・染色

[P-061] ムラサキの根を使用した紫根染の染色温度と染色結果について

*青木 正明¹ (1. 京都光華女子大学短期大学部)

キーワード：ムラサキ、紫根染、草木染、古代染色

【目的】

古来紫色を染めるムラサキを使った正確な染色手法は現代に受け継がれていないが、経験的な工芸染色手法および先行研究では高温で抽出・染色をすると色が濁るため色素が高温に弱く変質すると想定されており、60℃前後で染色作業をすることが推奨されている。しかしムラサキを使用した江戸後期草案の紫雲膏生成の際は100℃を超える加温環境にも関わらず当該軟膏が赤紫を呈していることから、加温による色素挙動を確かめるための検証を行った。

【方法】

国産ムラサキを1-プロパノール抽出、及び水抽出を行い、ミョウバンによる先媒染した絹布を、それぞれ低温（60～65℃）、及び高温（85℃～90℃）の温度環境下で染色し、分光測色にてL*a*b*値及び可視光波長毎のK/S値を求めた。

【結果】

プロパノール抽出、水抽出とも高温染色のほうがC*値が減少しa*/b*値が減少し、高温染色によって彩度が減少し青みの紫に移行した。しかしK/S値については、プロパノール抽出では吸収波長の2つの山（550nm付近及び600nm付近）について高温染色のほうが吸収量が減少したにもかかわらず水抽出では吸収波長の2つの山とも吸収量が増加した。また、プロパノール抽出及び水抽出とも短波長側及び長波長側の吸収量は高温染色で増加した。これにより紫を呈する主色素が単に高温で変質していない可能性があり、更なる検証が必要であることが示唆された。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

2025年6月1日(日) 10:40～11:20 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 材料・整理・染色

[P-063] 学校現場における染色教材の開発と実践

—合成繊維の染色実験とパッチワーク制作—

*齋藤 愛¹、天木 桂子² (1. 岩手県立大短、2. 岩手大学)

キーワード：染色、パッチワーク、教材

目的 ポリエステル、アクリル、ナイロンの三大合成繊維は現代の私達の衣生活を支える被服の主要な素材である。本研究では、合成繊維を用いた教材開発を目的とし、染色実験と作品制作を実施した。授業前後に意識変化に関する調査を行い、本教材の有効性と改善点を検討した。方法 2024年12月～2025年1月に岩手県立大学盛岡短期大学部生活科学科生活デザイン専攻の専門科目「テキスタイルデザイン演習」の受講生8名を対象に実施した。試料布はポリエステル、ナイロン、アクリルである。染料は市販の分散染料を用い、染色条件は、濃度50.0%owf、浴比1：100、染色時間30分、温度60℃である。さらに、キャリアーを用いて助剤の効果を確かめた。助剤濃度は5.0%owfである。水は水道水を用いた。染色後は染着性を目視で確認した。さらに、事前に染色したナイロン（13cm×13cm）2枚を使って、パッチワーク制作を行った。授業前後にはプレテスト、ポストテストを行い、意識変化を調査した。結果 調査結果から、染色や衣料廃棄物に対して関心をもつようになったという回答がみられた。自由記述では、「染料に種類があり、よく染まるために必要なエネルギー量が違うことが分かった」や「端切れを再利用することで環境問題の改善につながると思った」とあり、本教材は染色と環境問題への関心を高めるとともに、被服素材の教育教材として有効な手法であることが示唆された。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40～11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 構成・衛生

[P-065] 炊き出し活動や野外活動時に用いるアームカバーの開発

*菊地 紗代¹ (1. 東北生活文化大学)

キーワード：アームカバー、野外活動用品、商品提案

目的 本研究はアームカバーの開発を目的とし、主に炊き出し活動や野外活動時に使用する際の課題解決を図ることを目的とした。

方法 連携先でのアームカバーは主に使い捨て型を使用していたため、繰り返し使用できる要望やこれまでの活動で生じた問題点を調査し、コンセプトや生地を選定、デザイン及び縫製方法等を検討した。

結果 アームカバーのコンセプトは機能性・使いやすさを念頭に、炊き出し活動や野外活動時の安全面・衛生面を考慮し、使い捨てによる無駄を出さない環境配慮、幅広いサイズ対応等とした。これを受け、生地は洗濯可能で透湿・撥水・防炎加工が施されたポリエステル（100%）を選定し試作した。設計では、アームカバーの上下内側にゴムとコードストッパーを付けるとともに、外袖のタテ方向にプリーツを入れた。この結果、サイズ調節が可能であることに加え、腕の曲げ伸ばしや作業を妨げにくく、審美性を兼ね備えたデザインとなった。また、プリーツによる袖口の水や汚れのたまりを防止するための中縫い等の縫製面の工夫も施した。さらに、反射テープを付けて夜間や薄暗い時の活動に配慮した。本商品を本学服飾文化専攻の有志学生21名の協力を得て25組制作し、大学祭でのイベントにおいて災害食の調理に携わった連携先の方々と学生に使用してもらう機会を得た。

※本研究は特定非営利活動法人キャンパー様からの助成を受けて行ったものです。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40～11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 構成・衛生

[P-067] 中高年における凍結肩と衣服の着脱動作に関する実態調査

*高橋 佐智子¹、丸田 直美¹、前田 亜紀子¹ (1. 共立女子大)

キーワード：凍結肩、衣服の着脱、日常生活動作 (ADL動作)

目的：凍結肩（いわゆる四十肩・五十肩）は、日本のみならず世界的に多くの人が発症し、日常生活動作（以下ADL動作）に支障をきたすことが知られている。40～60代の発症が多く、肩関節の可動域が大幅に制限され、着脱動作が困難になる。先行調査にて、60代男女各1000名を対象に凍結肩の経験を調査したところ、約半数が経験していた。この結果を踏まえ、本研究では、凍結肩と衣服の着脱に関する中高年の実態を調査し、衣服設計の基礎資料を得ることを目的とした。

方法：Webアンケートを用い、40～60代男女642名（各年代・性別107名）を対象に、2025年1月に調査を実施した。調査項目は、①凍結肩の発症状況および発症時のADL動作の6項目、②発症時の衣服の着脱に関する7項目とした。

結果：凍結肩の発症経験は、60代女性52.4%、60代男性51.4%、50代男女ともに39.3%、40代男女ともに26.1%であった。自己申告であるものの、先行研究の「凍結肩患者の7割が女性」との結果とは異なる傾向が見られた。また、60代の男女ともに「50代で発症した」との回答が最多で、職場や家庭での活動に不自由を感じていた。さらに、発症時に困難を感じたADL動作として「上半身の着脱」が最も多く、半数以上が該当した。特に、かぶり型の半袖・長袖Tシャツの着脱に不自由を感じていることが明らかとなり、凍結肩に配慮した上衣設計の必要性が示唆された。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40 ~ 11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 構成・衛生

[P-069] 若年女性におけるアクセサリー着用の実態と重心動揺への影響

*伊豆 南緒美¹、佐藤 真理子¹ (1. 文化学園大学)

キーワード：アクセサリー、ファッション、アンケート調査、重心動揺

【目的】近年、インターネットやスマートフォンの普及に伴う購買チャネルの多様化により、商品の購入はより手軽で便利なものになっている。アクセサリー市場においても、安価なアクセサリーの増加、ハンドメイド作品の登場等により、若年層におけるアクセサリーの購入・着用は身近なものとなった。本研究では、アクセサリー着用の実態と、着用による重心動揺への影響を明らかにすることを目的とした。【方法】アクセサリー着用の実態把握を目的として、若年女性を対象に、アンケート調査ならびにアクセサリーの質量調査を実施した。また、アクセサリー着用による身体への影響を検討すべく、着用実験を実施した。着用アイテムはイヤリング及びネックレスとし、立位正常姿勢における重心移動の様子を、重心動揺計を用いて計測した。【結果】アンケート調査では、アクセサリー購入時に重視するポイントとして、デザインを挙げる調査対象者が多く、重さを重視するとの回答は少なかった。アクセサリーの質量調査において、ネックレスや腕時計の質量が大きい傾向にあった。また、アクセサリー着用による体調不良経験者が一定数存在することが明らかとなった。着用実験では、軽量のアクセサリー着用でも姿勢制御に影響を及ぼす可能性が示唆された。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40～11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 構成・衛生

[P-071] 寒さを忘れるホカホカ手袋をさがそう

*野中 健志¹、鈴木 優友姫¹、鈴木 玲花¹、小泉 津奈¹、黒崎 はな¹、西山 京花¹、丸山 剛輝¹、本村 陽葵¹、高城 麻悠子¹、篠崎 俊哉¹ (1. 神奈川県立横須賀高等学校)

キーワード：温熱的快適性、手袋、保温性

目的：冬季の防寒用に使用される手袋3種を用いた被験者実験により温熱的な快適性に手袋の素材が及ぼす影響を検討した。

方法：日常使用する手袋の条件として以下の3種を実験に用いた。①ポリエステルが主の編み手袋（以下編み物）、②レーヨンが主のスポーツ用手袋（以下スポーツ）、③ポリエステルが主のキルティングとボアの手袋（以下キルト）被験者は健康な高校生3名である。安静時に熱流計、温湿度センサを用いた被験者実験より、各手袋の熱抵抗値（保温性）を評価した。無風、有風の2条件で15分間安静立位後、踏み台昇降を15分行い、その後、また、15分安静とした。その間、温湿度センサを用いて手袋内の温湿度を連続測定した。運動の影響、風の有無の影響を検討した。

結果：最終的な環境の違いによる温湿度変化は以下の通りとなった。

温度変化

平常時 スポーツ<編み物<キルト、風あり 編み物<スポーツ<キルト、運動時 スポーツ<キルト<編み物

湿度変化

平常時 編み物<スポーツ<キルト、風あり キルト<編み物<スポーツ、運動時 キルト<編み物<スポーツ

考察：スポーツは温度を保つ特徴があり、キルトは手袋内の温度を保ちつつ上昇させる特徴があると言える。多くの場合、測定結果と主観申告の結果が一致した。しかし、運動後は温度が変化せず、主観申告の結果では冷たく感じていることから手は温まるが手以外が冷えることで寒いと感じていたと考える。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

2025年6月1日(日) 10:40～11:20 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服・心理・意匠・服飾

[P-073] 口コミ分析からみた靴下の購入・着用の実態

*高橋 美登梨¹、金井 光代²、内藤 章江³、藤田 雅夫⁴ (1. 埼玉大、2. 文化学園服飾博物館、3. お茶の水女大、4. 共立女大)

キーワード：口コミ、靴下、KHCoder、購買分析

目的 近年のファッション・アパレル産業は、国内供給量は増加する一方で国内市場は減少傾向にあり、今後、ファッション・アパレル産業の新規展開や市場拡大を図るためには市場分析がこれまで以上に重要となるといえる。本研究では、アパレル製品における消費者の購買分析をする新たな視点として購入時の口コミ（批評コメント）を取り上げ、購入・着用の実態を考察する。

方法 本研究では、流行の影響を受けにくいとされる「靴下」を取り上げる。大手調査会社所有の衣料品パネルデータのうち、JAMコードの商品コードが45もしくは49で始まる「靴下」を分析対象とし、回答者「女性」、カテゴリー「婦人靴下」、口コミの文字数が「2文字以上」のものを分析した（2020年1月～2024年7月）。対象件数は15,176件である。口コミの分析はKHCoderを用いてテキストマイニングを行った。

結果 (1)分析対象の口コミをすべて対象に共起ネットワーク分析を行い、共起関係を図式化したところ、商品の特徴によって口コミの傾向が異なることが示唆された。(2)「リピ（リピート買い）」や「愛用」の語句が抽出された。特定の商品を繰り返し購入していることが予想されたため口コミの個人データを確認したところ、ストッキングは特定のメーカーを複数回購入している割合が高かった。(3)「引き締め」「脱げる」「着圧」「暖かい」等、商品の特徴を示す語句が抽出された。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40 ~ 11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 心理・意匠・服飾

[P-075] ミシン刺しゅうにおける新たなデザイン手法の検討 プログラミング刺しゅうツールの活用

*本多 素子¹ (1. 昭和女大)

キーワード：ミシン刺しゅう、デジタルファブリケーション、プログラミング、スクラッチ

目的

オリジナルデザインでミシン刺しゅうを行う場合の刺しゅうデータ作成方法は、従来は専用ソフトウェア利用が唯一の方法であったが、最近ではプログラミングによって描画から刺しゅうデータ生成までを行うツール（以下、プログラミング刺しゅうツールと略記）が登場している。

前報¹⁾ ではプログラミング教育の観点から検討したが、本研究では、プログラミング刺しゅうツールによるミシン刺しゅうデザインの表現の可能性について示唆を得ることを目的とする。

方法

前報¹⁾ と同様に、ビジュアル・プログラミング言語Scratchの刺しゅう拡張機能を用いて画面描画およびミシン刺しゅうデータ生成を行い、家庭用刺しゅうミシンで刺しゅうを行った。プログラミングによる描画の特徴の一つである繰り返し処理による連続模様を、今回のデザイン方針とした。

結果

まず図形パーツを描画するプログラムを作成し、そのプログラムに図形パーツの変形・移動等の処理や繰り返し処理等の制御を追加する、という手順で多様な幾何学・連続模様のデザインを効率的に作成し刺しゅうすることができた。また三角関数など数学的要素を取り入れることにより、デザインの幅が広がった。さらに描画内容をベクター形式でも出力し、アプリケやステンシルの技法と組合せた表現にも展開できた。

1) 本多素子. Scratch刺しゅう拡張機能の学校教育での活用可能性の検討. 日本STEM教育学会第6回年次大会. 2023,29-32.

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40 ~ 11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服 - 心理・意匠・服飾

[P-077] 若年女性のジェンダーレスに対する姿勢がアパレル購買行動に及ぼす影響

*加藤 千穂¹ (1. 相山女学園大)

キーワード：ジェンダーレス、アパレル、購買行動

目的 近年、性のあり方の多様化により、ジェンダーレス制服を採用する学校が増えており、若年女性のジェンダーレスに対する考え方が徐々に変わりつつある。また、ファッションに関する情報入手方法や店舗の利用方法、購入方法などアパレルの購買行動についても大きく変化している。本研究では、若年女性のジェンダーレスに対する姿勢とアパレルの購買行動の関連性について明らかにすることを目的とし、調査を行った。

方法 調査対象者はアパレル分野の授業を受講する女子大学生55名である。調査方法は、Googleフォームを用いたインターネット上からの調査とした。調査項目は、購買行動に関する調査項目およびジェンダーレスの姿勢に関する項目、パーソナル質問項目とした。調査実施期間は2025年1月である。

結果 調査結果より、「社会的にジェンダーレスファッションは推進すべきである」について「非常にそう思う」「そう思う」と回答した肯定派は76.4%、「どちらともいえない」の中立が20.0%、「そう思わない」の否定派が3.6%であった。ファッションへの関心度、ファッション情報の入手方法は、肯定派、中立派、否定派の回答に差は認められなかったが、お気に入りのブランドやいつも購入する店舗に対するこだわりは、肯定派に比べ、中立、否定派の方が強い傾向にあることがわかった。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40～11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服・心理・意匠・服飾

[P-079] 着物文化のファッション化

毛皮の使用を事例として

*山村 明子¹ (1. 東京家政学院大)

キーワード：着物、毛皮、昭和

目的：今日の着物文化は、時代に応じて変化を遂げながらつくりだされてきた。特に第二次世界大戦終戦以降の現代社会では、着物の着用場面は晴着または非日常着としての役割が大きくなる中で、着物が伝統的服飾のカテゴリーから逸脱しファッション化することが、着物文化を存続させる遠因になることについて考察する。**方法：**主な一次史料として、戦前の『婦人画報』、戦後の『美しいキモノ』（共に婦人画報社）などを取り上げる。**結果：**近代日本における毛皮着用に関する先行研究（田辺，2009）では、近世までの不浄のものともみなされていた毛皮を衣料に採用するように転換したことが指摘されている。毛皮を採用することによる着物文化のファッション化は、戦前と戦後の2回のタイミングが確認される。第一段階は大正末から昭和初期における、欧米の毛皮ブームの流入であり、「世界的流行」（婦人画報，1930）の狐の襟巻は着物の装いにも新しいイメージを添加した。第二段階は1960年前後に若い女性の晴着に採用された白いショールの流行である。ただし、これは毛皮に限らず、アクリル製で毛足の長いシル風に織り上げたものが商品名としてミンクと名付けられ流通したことも少なからず影響している。この装いは正月、成人式の若い女性の晴着の定番の装いとなる。欧米文化を採用し吸収する中で、現代的な和装文化が定型化されており、流行と定着による新陳代謝が、着物文化を存続させているといえる。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40～11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 被服・心理・意匠・服飾

[P-081] 古代中国の服飾における菱形デザインの展開

*水野 夏子¹ (1. 大阪樟蔭女子大)

キーワード：菱形、古代中国、染織

目的 古代中国の服飾において、考古資料としては戦国時代前後より、多様な菱形デザインが施されていることが確認されている。しかし、これまでに服飾に施された菱形デザインの特徴や菱形という要素の意味などについての考察は行われていない。そこで本研究では、日本の菱形文との比較分析も試みながら、古代中国の服飾に多用された菱形デザインの展開内容、また幾何学文として扱われる菱形の装飾・ビジュアルとしての表現内容について考察する。

方法 考察にあたっては、主に唐代までの文献史料と図像史料、および遺物（染織品）を通して調査・分析を行った。

結果 古代中国の服飾（唐代まで）に見られる菱形デザインは、諸子百家をはじめとする各思想の変化とその細分化に従い、デザインが多様化していったことが推察される。また、中国大陆において繁栄していた地方文化の特色（楚文化）や、異民族・外来文化との接触に伴う影響が反映されていることが窺える。古代中国の菱形デザインは日本の菱形文の形成へと繋がってはいるが、日本における菱形とは異なる展開を呈しており、植物としての菱を図案化した形態や菱自体に込められている意味合いとの関係性からの系譜というよりも、山岳信仰からの影響や吉祥物としての捉え方などの表現内容を有しながら、日本よりもバリエーションに富み種々に展開してきたことが読み取れる。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40～11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 住居

[P-083] 日本人の共生意識に対応した子育て・子育てのための共生型集住に関する研究

子育て状況と共生型住宅への居住意向

*大橋 寿美子¹ (1. 大妻女子大学)

キーワード：子育て、共生住宅、日本人の共生観

目的：家族の小規模化や近隣との交流の希薄化により孤独や孤立を感じる人が増えている。安心して生み育て、豊かな人間性や社会性を育む子育て・子育てのための居住環境の再構築が課題である。本研究は現代日本人の共生意識に適した、子育てや生活の協力関係をもつ共生型集住のあり方を検討する。なお本稿では子育て状況と要望および共生型住宅への居住意向について明らかにした。**調査方法：**ネットリサーチ会社のモニタを対象（子どもをもつ20～59歳の男女1206名、男女比率1：1、共働き率67.7%）としたアンケート調査を実施した。調査期間は2024年11月である。**調査結果：**①**子育て状況と要望：**子どもを預けられる人が一人もいない人は約半数、子育ての悩みを相談する人が一人もいない人は4割であった。また住まいや地域で子育てを通じた付き合いやサポートを必要としている人は半数以上みられた。②**共生型住宅への居住意向：**コレクティブハウスなどの共生型住宅に関心がある人は、全体の3割強で、共働きの人の4割強、子育てサポートを必要としている人の5割が関心を持っていることがわかった。また共生型住宅に期待する事は子ども同士で遊ばせる、子どもの見守り、親同士の交流であった。協働での行為は共用空間の掃除と調理・片付けを希望し、空間にはプライベート空間の確保や他世帯との適度な距離、子どもの様子の見守りなどの安心・安全性を重視していることが明らかになった。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40～11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 住居

[P-085] 住生活文化を学ぶカードゲーム教材の開発と教員養成大学学生への実践

*江口 千夏¹、鈴木 佐代¹、豊増 美喜² (1. 福岡教育大、2. 大分大)

キーワード：伝統文化、住教育、和室、語句、カードゲーム教材、大学生

目的 伝統的な木造建築や和室の減少により日本家屋特有の部位や空間、それを表す言葉が失われつつある。実物を体験できず、言葉が日常的に使われなくなることは、住生活文化の学習に影響を与えている。本研究では、言葉に親しみながら住生活文化を楽しく学ぶカードゲーム教材を開発し、中高生に実践する前段階として大学生を対象に実践した結果を報告する。

方法 日本家屋に特有な部位や空間、住宅様式を写真・イラストで示し、機能や暮らしを解説した32枚のカードを作成した。ゲームは同じカテゴリーのカードをそろえてカルテット（4枚組）を作る内容で、参加者はカードの言葉を発話し、相手からカードを取得する。2024年12月に福岡県の教員養成大学の学生9名を対象に実践し、事前・事後アンケート調査を通して教育効果を検証した。

結果 事前調査では、「障子」や「縁側」の言葉は「たまに言うときがある」、「欄間」「続き間」「付書院」「町家」等は「全く知らない、初めて聞いた」が多かった。事後調査では、全員が「楽しかった」、「日本の住まいの伝統や文化について理解が深まった・やや深まった」と回答した。また約半数が「新しい学びがあった・理解が深まった」と回答した。「欄間」「続き間」「付書院」等の8カードには、事前調査で「全く知らない、初めて聞いた」言葉が多く含まれていた。写真に比べてイラストはわかりにくいこと、解説文にもふりがなが必要であることが明らかとなった。

ポスター発表 | ポスター発表：被服／住居

📅 2025年6月1日(日) 10:40～11:20 📍 2G (教育文化ホール大集会室)

ポスター発表

◆ 住居

[P-087] 高齢者が居住するコレクティブハウスの実態調査

*西田 思佳¹、藤居 由香¹ (1. 岩手県立大)

キーワード：コレクティブハウジング、コレクティブハウス、高齢居住者、福祉住環境

【目的】本研究では、国内の高齢者が居住するコレクティブハウスの運営実態、入居者の特性、住空間、集住による活動等の特徴を明らかにすることを目的とした。【方法】6ヶ所の住宅（4ヶ所が高齢者のみ、2ヶ所が多世代居住）を対象とし、公営住宅3ヶ所、公社住宅1ヶ所、医療法人（サービス付き高齢者向け住宅）2ヶ所の運営者にアンケート調査を実施した。2024年10月～11月に郵送・メールにより61設問の調査票を配布回収した。【結果】調査対象選定の段階で、コレクティブハウスの名称を老人ホームへの使用事例や、デイサービスへ用途変更した住宅がみられた。調査票からは、5か所で定期的な行事や食事会を開催し居住者同士が関わる機会があるものの、6ヶ所とも居住者主体の運営ではないこと、共働の家事は2ヶ所、コモンミールの実施は0ヶ所と、コレクティブハウジングの要件を満たしているとはいえない現状が明らかになった。1棟あたりの住戸数は10または20程度で、入居開始年が約10年前と20年前に集中していたが、居住年数はいずれも約7～8年であった。高齢居住者には、3ヶ所で訪問看護または訪問介護利用者がいた。また、車いす使用者10名、杖使用者9名、シルバーカー使用者1名いた。医療法人が運営する住宅は、職員が常駐する高齢者限定住宅で、要支援・要介護該当者が入居条件であった。福祉住環境面では、トイレや浴室に介助スペースが確保されていたのは4カ所だった。